



団体名	なにわホネホネ団	活動タイトル	博物館で活躍しよう！発達障がいの子どものための学びづくり	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■活動風景	
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	<ul style="list-style-type: none"> 博物館が障がいの有無にかかわらず、全ての子どもたちが楽しみ、学び、参加できる居場所になること。 大阪市立自然史博物館では多様なボランティアグループがある。自分の興味のある分野のボランティアに参加ができ、そこで学び、学校や家庭以外の居場所が作れるようになること。 発達障がいのある子どもが自分の強みを生かしてボランティア活動に参加し、自己肯定感を高めること。 この活動を通して博物館関係者のみならず地域社会の中で発達障がいの認知を高め、正しい理解を深めていくこと。 		大阪自然史フェスティバル出展	 <p>福祉関係者が出展したのは初。興味や関心を持ってくれる方は多く、問い合わせもあったが、他のブースを見習い展示方法などは改善の余地が多かった。</p>
●団体の社会的役割(ミッション)	<ul style="list-style-type: none"> ①標本作りを通して自然史博物館を支援し、標本の科学的な役割を普及すること。 ②博物館を社会にひらき親しみやすいものにする。 			
●団体の活動基盤	<p>人的資源：生物学、解剖学だけでなく参加者の精神状態、心理状態に関する専門知識を持ったスタッフが複数名のメンバーが、当事者からの相談や福祉的な配慮に基づいた対応はもちろん、他のボランティアへの対応法の提案や、正しい知識の啓発ができること。</p> <p>物的資源：落ち着いて休憩、クールダウンできるスペースづくり。例として必要に応じてイヤーマフの貸し出しや、その子にあった作業道具を供給できる状況を整えること。（変化に敏感なことが多いので、随時同じもの、自分の道具を調達できると安心する）</p> <p>活動資金：参加者の学びやすさや投入できる予算を独自で持っている状態（基本的な消耗品は博物館の方で提供されている）</p> <p>情報：標本だけでなく、子どもの学びや発達に関する専門家や団体と連携できていること。定期的な勉強会の開催や最新情報に触れるための学会や研究会への参加。</p>		フライドチキンで骨格標本を作ろう	 <p>鶏のぬいぐるみや写真、親しみやすい紙芝居などを取り混ぜ、抵抗感が少ない食材を用いて標本作成を行なった。また、白衣を着用することで気分が切り替わり、集中して作業に取り組むことができています。</p>
■活動報告				
<p>「てごぼさん」の名とともに博物館業界と福祉業界に存在が認知されつつある。</p> <p>①博物館関係者から福祉的な視点での気付きを聞く機会が増えた。来館者への福祉対応や、配慮が必要な大学生の学芸員実習の受け入れなど、具体的な相談が増加した。</p> <p>②大阪市立自然史博物館で実施された文化庁補助（Innovate MUSEUM 事業）に連携団体として参加。オンライン研修や学会での反響も多く、8月には佐賀大学美術館に講師として招かれるなど「自然史博物館での発達障がい児者への取り組み」といえばてごぼさん」というように、知名度は確実に上がっている。</p> <p>③福祉関係者からは精神保健福祉士が活動を行っていることに対し、安心感があるとの評価もいただいている。</p> <p>④ワークショップなどを手伝うメンバーは22名になり、当初は、障がい当事者への対応が解らなかった人も気負うことなく対応法を習得し、楽しく活動に参加している。周囲に取り組みを話す機会も増え活動の周知につながっている。⑤博物館の場所すら知らなかった障がい当事者や支援者の博物館への来館が増加した。</p>			<p>①活動の啓発：自然史フェス出展（来場者17300人）多くの人の目に留まり、関心を持ってくれつつも毛色の違うブースに楽しみ方が解らない様子であったので、改善の余地あり。／福祉系季刊紙『檸檬新報』掲載</p> <p>②研修の企画開催：目標年3回→2回達成となった。各回の満足度は高く、次回の研修に対する期待も大きく感じる。</p> <p>③ワークショップ開催：当初の「手羽先を使つての骨格標本作り」は、活動を進めるごとに障がい当事者に応じた難易度や安全性を考慮し、「フライドチキンを使つての骨格標本作り」として目標を達成した。</p> <p>④(活動基盤の強化)：当事者アンケートの分析と、その結果からユニバーサルガイド「博物館の行き方動画」を作成</p>	
■事業を通じて得られたノウハウ			■望ましい社会状況を達成するための課題	
<p>発達障がいの特性についての理解が深まったことで、過集中や注意散漫などの特性を逆手に取り、時間無制限に工作に集中できる、逆に集中していても同じ場にいられる、休憩しながら戻ってこられる空間づくりができるようになった。個人の興味関心・特性に合わせて様々な情報の経路（見る、聴く、匂う、触るなど）が使えるワークショップを展開できた。また、集合時間への配慮（朝早くは活動できない）やタイムスケジュールの提示、入ってほしくない場所への禁止指示の出し方（ここからは入らないでねの色ガムテープをはる）、見通しがたてやすいよう時計をアナログとデジタル両方用意する、ワークショップに関係ないものを隠すなど視覚化が意識できるようになった。当初は「これさえしていれば」という構造化に対する慢心があったが、個別化の重要性を改めて感じる事ができたことが一番大きな学びであった。</p>			<p>①博物館への親しみや窓口を作ることではきたが、当事者にとって博物館が社会に出てからの「安心安全な第三の居場所」という認知にまでは至っていない。「博物館×発達障害児者」への活動はまだ入り口に立ったばかりであり、信頼関係を築きながら、博物館業界・福祉業界双方に働きかけ続ける。②博物館の文化活動を進めるために、裾野が広く、敷居が低く、健常者との交流も活発に行われている障害者スポーツの取り組みに学ぶ。③すでに実施されている自団体の取り組みの中に、発達障がいのある子どもの受け入れに有利な要素がないか、当事者とともに検証していく。④「発達障害への正しい理解」にはゴールはなく、知り続けたい、学び続けたいという場を提供し続けることが必要。そのために、博物館業界・福祉業界・当事者のニーズを拾い、また、その知見を蓄積し、効果的に発信していく。</p>	
			この1年間の活動を通じて	<p>発達障害児に配慮した「骨格標本作成講座」の実施</p> <p>を達成しました。</p>
			■受益者の具体的な変化（自由記入）	
			<p>当事者、福祉支援者が博物館に興味を持ち、楽しめる場所であると認識してくれた。また、博物館関係者が福祉に興味を持ち学ぼうという意識を持つてくれた。</p>	